

2019（平成31）年度 福岡女子大学 帰国生特別入試

〔 試験問題 〕

国際教養学科

# 総合問題

【 90分 】

## 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は4ページから12ページにあります。問題は全部で**1題**です。  
なお、13ページは下書き用の用紙になっています。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 4 試験開始と同時に解答用紙の**受験番号欄に受験番号**を記入してください。
- 5 試験終了後、**問題冊子は持ち帰ってください**。





問題 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

関連してもうひとつ指摘しておくならば、西田や漱石の青年時代には、往々にして恋愛が哲学的思索への入り口になったという事実である。もっとも知られたところでは、「恋愛は人世の秘鑰なり」の名言を吐いて、当時の客気あふれる青年たちの心をつかまえたキエイの評論家北村透谷である。透谷はその恋愛至上主義を自らジッセンし、それを文字通り「内部生命論」にまで発展させ、果ては自殺にまでエスカレートさせた煩悶青年のセンク者である。また漱石が「高山の林公」などと呼んで馬鹿にしたこともある高山樗牛が当時の青年たちにあれほど受けたのも、彼には『滝口入道』のような悲恋物語と高邁なヨーロッパ哲学とが共存していたからにほかならない。樗牛にも透谷ばりのこんな文句がある。

恋愛は美的生活の最も美わしきものの一乎。是の憂患に充てる人生に於て、相愛し相慕える少男少女が、薔薇花かおる籬の蔭、月の光あかき磯のほとりに、手を携えて互に恋情を語り合う時、其の楽みや如何ならん。彼等の為す所を以て痴態と笑う勿れ。かかる痴態は真に人を羨殺するに足るものならずや。一旦世事意の如くならず、思いしことは泡の如く消えて、運命、鉄の如く彼等の間を断たんとする時、百年の命を以て一日の情に殉し、相擁して莞爾として死に就くが如きは、人生何物の至樂か能く是に類うべき。「美的生活を論ず」

このトレンドは西田がゲーテやダンテを熱心に読んでいたときにピークに達していた。『ファウスト』ではグレートヒエン（とヘレナー）への愛が理想化され、『神曲』では永遠の淑女<sup>⑤</sup>ベアトリーチェへの愛が扱われるが、同時にそこに内面の悩みが描き出され、両書とも多くの青年たちによってある種の人生哲学の書としても読まれていたのである。時代はやがてこれにショーペンハウアーやニーチェの名をくわえることになるだろう。

こうした状況は漱石の周りでも同じことであった。それをもっとも象徴するのは、漱石の一高での教子藤村操の自殺である。一九〇三年五月二二日、藤村は次のような「巖頭之感」と題した遺書を樹の幹に書き記して、日光は華嚴の滝から敢然<sup>⑥</sup>と身を投げたのだった。曰く、

悠々たる哉<sup>かな</sup>天壤。遼々たる哉古今。

五尺の小軀を以て此大をはからむとす。

ホレーシヨの哲学<sup>ついで</sup>に何等のオーソリチーを<sup>あた</sup>価するものぞ、

万有の真相は唯だ一言にして悉<sup>つく</sup>す、曰く「不可解」。

我この恨を懐<sup>いだ</sup>いて煩悶、終<sup>ついで</sup>に死を決するに至る。

既に巖頭に立つに及んで、胸中何等の不安あるなし。

始めて知る、大なる悲観は大なる樂觀に一致するを。

満一六歳の青年というか、少年が書き残した遺書は当時一大センセーションを呼び起こし、『万朝報』よろずちようほうの主宰黒岩涙香などは「我国に哲学者なし、この少年に於て始めて哲学者を見る」（「少年哲学者を弔す」とまで持ち上げた。漱石もこの教え子の自殺にショックを受けたようで、『草枕』その他でたびたびこれに言及しているが、重要なのは、この事件が、少なくとも表向きは（一説にはその背景に藤村の失恋を見る向きもあるが、われわれにとってはそれは同じことである）、「万有の真相」を求めて得られなかったという哲学的な問いに発しているということである。黒岩の大仰な感動もそれを理由にしているのは明らかだ。

私が言いたいのは、これは当時明治の青年たちの間に広がっていたロマン主義の風潮のなせる業で、漱石も西田もこれと同じ空気を多分に呼吸していたということである。こういう目で漱石の内省的な作品を眺めてみると、いずれも男女間の愛がテーマになっていることに気づくだろう。

もつとも、西田の方は表だって恋愛を論じたことはない。しかし、その背景にそのような風潮があったことは確かであり、それに後押しされるようにして、彼の思索が生真面目に自分の内面を見つめ、そこから人生とは何か、真理とは何かという大問題に向かつていったのである。そうでなければ、『善の研究』を読んだ若き倉田百三かかわのあの興奮がわからなくなる。西田自身がその著作の序文に「哲学的研究が其前半を占め居るにも拘らず、人生の問題が中心であり、終結である」と書いたのも、やはりそのことから来ているだろう。

安易に自殺を肯定したりしない漱石と西田は、むろん藤村や倉田よりはるかに大人であった。しかし、その底を流れる心情においては彼らの間の距離はそれほど遠くなかったと私には思われる。戸坂潤はまったく別の観点から、西田哲学は「近代的な浪漫的な本質のものだ」（「無の論理」は論理であるか）と断定したが、私なりにその意味を解釈すると、そんなことになるだろうか。

最後に、この「内面」を表現することにおいて重要な言語の問題について述べておこう。これについても、西田のコンテクストにおいてたびたび書いてきたので、やや気後れがしなくてもないが、ここでは漱石をも含める形で論じ直してみたい。

私は本章の冒頭に、漱石はさまざまなタイプの小説を書くことのできた作家だと述べたが、これはとりもなおさず、漱石がそれだけ多様な種類の文章をクシ<sup>⑧</sup>することができたということである。漱石が学友子規を師として俳句をやったことはよく知られているし、晩年には漢詩作りを日課のようにしていたこともすでに述べた。必要があれば、『猫』に見られるような落語口調の戯れ文も書くことができた。次に引用するのは格調高い漢文口調の美文である。

暮れんとする春の色の、嬋媛<sup>せんえん</sup>として、しばらくは冥邈<sup>めいぱく</sup>の戸口をまぼろしに彩<sup>いろ</sup>どる中に、眼も醒むる程の帯地は金襴<sup>きんらん</sup>か。あざやかなる織物は往きつ、戻りつ蒼然<sup>そうぜん</sup>たる夕べのなかにつつまれて、幽闐<sup>ゆうげん</sup>のあなた、遼遠<sup>りょうえん</sup>のかしこへ一分毎に消えて去る。燦<sup>きら</sup>めき渡る春の星の、暁近くに、紫深き空の底に陥いる趣である。（『草枕』六）

これは主人公の画家が宿の女性那美<sup>なみ</sup>を目撃したときの描写だが、見られるように、普段はほとんど使われない難しい漢語を多用して、その謎めいたヨウエン<sup>⑨</sup>な美しさを表現した文章である。漱石の漢語のボキヤブラリーを見せつける文章といってもいい。『草枕』には全編を通してこのような難解な漢語が頻出する。同じ美文でも古文調が目立つのが『虞美人草』である。

春はものの句になり易き京の町を、七条から一条迄横に貫ぬいて、烟<sup>けぶ</sup>る柳の間から、温<sup>ぬく</sup>き水打つ白き布を、高野川の磧<sup>かわら</sup>に数え尽くして、長々と北にうねる路<sup>みち</sup>を、大方は二里余りも来たら、山は自<sup>おのず</sup>から左右に逼<sup>せま</sup>って、脚下<sup>はし</sup>に奔<sup>せん</sup>る潺湲<sup>せんかん</sup>の響も、折れる程に曲る程に、あるは、こなた、あるは、かなたと鳴る。

（『虞美人草』一）

私に正当な評価ができるかどうか自信もないが、当時の言語水準からして、いずれも相当ハイレベルのものだったのではないか。だが、これらの作品を書いたあとの漱石にとって決定的な問題となってきたのは、いま挙げたような文章が、どれも告白を基調とした心理小説を書くのにふさわしくないということである。難しい漢語を使えば使うほど、内面心理のリアリティから離れてしまう。それは和語の古文調も同じである。なぜか。それは漱石の表現しようとした心理内容が新しく、モダンだからである。まさに「新しい酒は新しい革袋に盛れ」の格言通り、漱石には「新しい革袋」が必要だった。

二 まったく同じことが西田にもいえる。西田がどれほど禅に関心をもっていたようと、実際にやっていたことはあくまでヨーロッパ的概念に基づく哲学であり、その素材も中心はデカルトやカントのような近代哲



学の文献であった。この内容を言い表わすのに既成の漢文はどうしてもそぐわない。漢語には当然漢語独自のニュアンスや連想が付きまとうからである。漢籍と同時に英語やドイツ語のできた漱石と西田には、自分の思索が緻密になっていけばいくほど、この彼我におけるニュアンスの相違を無視することはできなかった。あの『文学論』の冒頭にいわれる、英文学か漢文学かというよく知られた若き漱石の悩みも、結局はこの言語の相違にキチャクする<sup>⑩</sup>。

漱石と西田が必要とした「新しい革袋」、それは余計な装飾やニュアンスをできるだけ排除したニュートラルな新言語である。その意味で大きな意味をもったのが、彼らの勉学と並行して進行していた日本語の近代化である。具体的にはいわゆる言文一致の運動である。

ただし、この「言文一致」という標語は事態を正確には伝えていないことを知っておく必要がある。これは、よく誤解されているように、たんに「文」≡書き言葉を「言」≡話し言葉に一致させることではないからである。実際にそのような試みもなかった。また大雑把に見れば、「文」が「言」の方向に歩み寄ったことも確かである。

しかし、実際に起こったことは、たんなる話し言葉への接近というより、むしろ話し言葉に近い「新しい書き言葉」の創出というべきである。たとえば、今日われわれが普通に使っている言葉の末尾「である」は、「です」「ます」と並んで、このときの産物であるが、「である」を日常の話し言葉として使う人は今日でもない。それは新しい「書き言葉」として定着した言葉だからである。

西田のエッセイの中にこの経緯を述べた貴重な文章がある。それは文字通り「始めて口語体の文章を書き出した頃」と題した文章で、この中で西田は自分の書くものは厳密には「言文一致」とか「口語体」とかいうことはできないかもしれないが、それでも漢文書き下し文から「である」調の文章に変えていくのは自分にとって困難な体験だったとして、さらにこう述べている。

言文一致体というものは、誰が始めたのか知らない、又そういうことを調べて見たこともない。私の記憶では、たしか「国民の友」で山田美妙斎が「胡蝶」とかいう小説を言文一致体で書いたものが出た。それが私には文章としての言文一致というものを見た始であった。(中略)併ししか哲学の論文などを口語体で書くと云うことはまだ中々であった。私なども大学で試験代りに論文を書いていわゆる所謂漢文書き下しであった。

この経緯については『西田幾多郎の憂鬱』(第九章)の中で書いたので、これ以上述べないが、要するに、われわれが今日目にしている西田の哲学の文章は、広い意味での「言文一致体」の文章、すなわち新しく創出された日本語だということである。

漱石にはこのことがもつと当てはまる。われわれ今日の読者が、たとえば『こころ』を読んでも、言語的にはほとんど違和感がない。しかし、そのことを以て、漱石も現代語を書くことができたと考えるのは倒錯である。なぜなら、漱石たちこそが、そのような「新しい日本語」を創り出した当人なのだから。漱石や西田がそれぞれの分野で独創的な思想を發展させることができたのは、彼らが同時に新しい言語の開

発者でもあったからである。柄谷行人の言葉を借りていうなら、まさにこの新しい言語「制度」が彼らの「内面」と「内省」を可能にしたといってもいい。

(小林敏明『夏目漱石と西田幾多郎―共鳴する明治の精神』岩波書店、二〇一七年より)

注 「胡蝶」……「胡」は引用原文そのママの文字表記。山田美妙作品の本来の表記は「蝴蝶」。

問一 傍線①から⑩の漢字はカタカナに、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 傍線部イ「このトレンド」とはどういうことを指しているか、本文中の語句を使って、答えなさい。

問三 傍線部ロ「倉田百三」の作品を次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 生まれ出る悩み   イ お目出たき人   ウ 出家とその弟子   エ 青銅の基督   オ 路傍の石

問四 傍線部ハ「そのこと」とはどういうことを指しているか、本文中の語句を使って、答えなさい。

問五 傍線部ニ「まったく同じこと」とあるが、(1) 漱石におけるどういうことと (2) 西田におけるどういうことが同じだといえるのか、それぞれについて筆者の考えていることを書きなさい。

問六

傍線部ホで「事態を正確には伝えていない」と述べていることに関して、次の二点それぞれについて筆者の考えを書きなさい。

(1) どのような間違いがあるというのか。

(2) どう考えることが正しいというのか。

問七

傍線部へ「広い意味での「言文一致体」の文章」とあるが、筆者の考えている(1)「広い意味での「言文一致体」の文章」に対して、そうではない(2)「広くない(＝狭い)意味での「言文一致体」の文章」というものについて、(1)と(2)それぞれを「話し言葉」という用語を交えながらどのようなものであるのか、分かりやすく書きなさい。

問八

傍線部トで示されている「言語」と「思想」に関する筆者の考えに対して、あなたがどのように考えるかを明確に示しながら、四〇〇字以内で論述しなさい。







